

田吉著 日本開化小史 四

五

海印十号

柳田文庫
文庫11
A1627
4



文庫11
A1627
4

田口卯吉著

日本開化小史

田口氏藏版



日本開化小史卷の四目錄

第七章

千三百年代小至りて日本の文學始りて世に出で
一 事

千六百年代まで文學此有様

千六百年代の末漢文一變せ一 事

同和文の始りて世小出で一 事

和文と顯はまたの想像

千八百年代文學の進歩

第八章

千九百年代文學の大小進歩と一 事

日本開化小史 卷四 目錄



日本文章の基礎立ち事

編史の体裁改良セ事

法律の成り事

二千年代の末有益なる著書多く顯り事

佛法の文學に効ある事

二千百五十年以後文學次第小退歩セ事

其時々事情と想見して文學は消長を知る事

想像の沿革



日本開化小史卷の四

第七章

日本文學の起原より
千八百年代まで

田口卯吉著

文學と人の心は顯像なり大凡そ人の心は世小顯
る、もの其種固小多し或は政治の上は顯はる、もの
のあり或は風俗の上小顯りふ、ものあり文學と云
文章の上に顯はる、ものなり其顯りふ、もの智あり
情あり情の文章は顯りふ、もの之を記事体と云
ふ歴史小説の類之小属を智の文章に顯はる、もの
之と論文と云ふ學文論說之小属は此二者共是れ
文學の本体なりて其文章に顯りふ、小至して互

不相錯綜して明に判別をせらるらばと雖ども其性質
 自ら相異なる所あり蓋し論文の研究を主として物の
 理を説き以て讀む人の智を服せしむるものなり故
 不之代記を不れ人を必き高尚の智なかるべからず
 記事の想像を主として物に有様を寫し以て讀む人
 の情を感ぜしむるものなり故不之代記を不れ人の必
 ず高尚の情なかるべからずされが智と情との進歩
 ハ文學の史に最も明し示さるべしはべらざる所あり
 人の心を得て區別をせしむるの境も何れも情
 余の熱心其真状を考ふるに心を五官に集りし
 官の外其心ありとを思はざるなり然れども今論
 辨の便ふらんことを求めて外物より感觸を受くる
 もの性情と云ふ外物を制せんとすはもれを智と云

今其智情の進むと進まざるを因りて人の心は
 有様如何に異なるやを尋ぬるに初代不ありては人
 人衣食に急りて物事に研究を經ざり部分多きが
 為り不凡そ心不解し得ぬ事ハ大りた之を神業と飯
 そること多し是其智の有様なり又數多の事物に接
 ずること多し是れ數多の交際をも經ざり代以て其想
 像淡泊し味なく迂遠にして曲折少し是れ其
 情の有様なり文運進歩の後及ひて人々一事に
 其心を注ぎ其原因を發見すは不ありは安んぜ
 ざるが為り不物毎に研究を經る部分多し蓋し初
 代の人とても今日の人とても職掌外の事ハ多くハ

世人の言ふがまに信ずること常なるを各自職
 掌上の事不就て研究せ増進するに從ひ世人一班自
 ら迷謬の事を信せざる様にならざること斯う是に於て
 乎自然の道理を説明する所の學問社會の有様と進
 歩せしむるは論文等出で来るなり是れ智の變遷な
 り人の原因を探るの心あり野蠻の人は禍災を神
 業をば開明の心なり此源因を探る即ち禍災を免
 皆理をば探るの心なり此源因を探る即ち禍災を免
 る天性をば出又交際も漸く廣くなり各種の人情風俗
 とも見聞をば為め小想像甚だ静かに且つ緻密な
 なりて詩歌小説等此樂より趣向出づ是れ其情の
 變遷なり要すふ小記事の巧みなるは想像の密なる

にあを論文の精なるは智れ洽きふあり其精粗巧拙
 則ち社會貨財の進歩に従ふその小なり之を以て
 開化の進不進を徴證する不足るものなり議者或は
 言ふ詩賦の想像を古に盛んして後世も衰へ學問
 の研究を今日に盛んして古代に欠くと特に知ら
 らず兩者共に時世の隆盛に従ふる進むものなりて詩
 歌ハ特に先づ顯はるも此たること我々が日本の
 文學史を見るものは其言の虚ならざるを知らん
 二千二百年代に至りて封建亂離の災日本諸州に洽ね
 くして世の有様彼が如く衰へ亂きたりしを文學の
 式微亦た極まり今更に往時を溯りて日本文學は本

源を尋ね其流小沿ひ其變遷を探りて二千二百年代まで小下りて熟く我が國文章の最も古きものを探尋ぬるは千三百年代より以前の事ハ貌として考ふべからざる蓋し我國古代小ありて文字なく人々唯く言語を以て其意を通したるのみ小て彼れ祝詞宣命及び和歌の類も文學あるは前よりくより行つたが如し其後三韓入朝し百濟内属を小至りて漢字漸く我國小傳はり其音を以て其儘し和語と寫すこと、多々あり之と假名と云ふ吳音先つ入り其後漢音入りものなり古事記皆吳音なり山崎美成著文教温古然きども此時より以後専ら行きて所を漢文と學ぶ小ありて和語を以て文章と綴ること、全く行きて唯た

和歌祝詞若くハ宣命小のみ此假名を用ひたるが如しされが我國古代の文章よりて今も傳ふるものと實は漢文を以て始りすと即ち千三百年代上官太子の十七憲法こそ最も古きものを述之小次ぎて千四百年淡海帝の時より以後漢文愈々盛ん小ありて此年代小々近江朝廷の令太寶令古事記太安麻呂撰日本書記舍人親王太安麻呂清人撰等養老令の撰あり千五百年代小至りて續日本記菅野真道撰藤原大同類聚醫古語拾遺齋部廣新撰姓氏錄萬多令義繼清原夏性靈集祕藏寶鑑海の撰懷風藻近江朝廷の末野等集ふり撰者淡江文華秀麗集撰者詳ら經國三良岑安世滋野貞主等の撰小千四百年代集百年代より千五百年代の末に至る千六百年代

至りて日本後記藤原冬繼文德實錄藤原基經續日本後記藤原房等撰
 三代實錄藤原時平内裏式藤原冬嗣等類集國史菅原弘仁式藤原冬嗣
 等貞觀式延喜式本朝文粹藤原明衡の撰あり茲小至りて我
 國の文學始りて顯つこと云ふて可なり蓋し史を紀し
 事と論を依りて人心進歩れ成績ありて之茂其以前より比
 ずれど大なる懸隔ありべしと雖も時世の幼稚なる
 小當りて其成績の美と見れば甚だ難しとをされが夫
 の千三百年代より千六百年代小至りて編纂志あり
 し史類を閲すべし其最も意を注ぎたる所を歲月時日
 此詳密神祇の祭祀赤雪白雉の發現等の類並に其外當
 時の人々心儀以て祥瑞妖孽と認めたる事件を統記し

たりとてふて絶えて事件の要不要を識別し取捨筆削
 の智を用ひざる所なきが如し故に後世の史家が認め
 て以て編史の要點となりしをふ一事件と他の事件との
 關係を示す等れ事あり絶えて心付らばりのみならず
 亦彼の支那れ史小多く記する所の一人の品行性質よ
 り公衆に及ぼしたる影響をも記す事あり唯く面前
 小顯りたりは事件を其儘に記載する小止するのみ而
 して其如何なる事情よりして起りし乎に至りては著
 者全く注意を欠く蓋し社會事多し史を多しもの唯有要
 の事件を記する小止りざるべからず然る小當時れ史
 更之茂削ることなく苟くも事ありと云へば人事小

關係なき事すても之を記載し唯だ卷帙の洪濤なる代
以て功績ありと心得し如きも實に惜むべきなり
要すは是等八年表にして歴史にあらざるなり史を
紀するに於て此の如く故に事を論ずるに於ても又其
弊を免れざる蓋し人の事を論せんは先づ一箇の定説
なきべしうらざることを論を俟たざるを然るも古
人の序文若くは論文代書を見る代見れば已れ先づ一己
此定見ありて而して后筆を執るはあらざるなり為り小
大うたら四六此句排偶の文代以て外部より議論を引
出を代勤りたるが如く抑も文學人の心を顯しをも
めなり人の心固より四六を以て量を得るもの小あら

る天下の事物亦初より排偶より成らざるは満胸の
議論吐露せんと欲せざる必らむ心導く處に従ひ決
して文章上の法則小掣肘せらるべからざること理の
當然なり然るも議論かくして之を記すは故に法則の
手引小依りて言ふべき事と思ひ出さんと其具体決
て真体小あらばざるあり之小加ふも小至難の文字と連
ねて強ひて古語を博し小誇らんと欲するの弊なり夫
れ十分議論ありて之代記すも小を古字を用ふるも
解し難きものなり小初より言はんを欲する主意不
くして強ひて古字を用ふるに於て豈に高論と聞くを
得んや是蓋し人心の未だ進まばる小當りて至難の

外國語を以て之と文章不顯ハさしやたつた致を所ふ
り唯僅ら小三好清行、菅原文時の二封事の見べきあ
るのこ

然さども文學進歩の勢ハ永く文体ハ澁滯を以て得て
抑制をべき小あらず千六百年代の末より彼のうたぐ
るハ漢文の体を漸く日本の語法と親和し稍く人々
ハ自由ニ記載し得るハ体を得る小至れり彼の將門記、
純友追討記の如き其文体今日より之を見まが極りて
奇異しして驚くべく笑ふべきものありと雖ども之を
彼の法則ニ拘束せらるるハ國史論文小比をれが自ら
其意代述ふに滑らかなる姿あり且つ此等の書ハ決し

て巧と稱をべき小あらずと雖ども稍く人の動作より
世の事情と述へんと欲すは小適を多あるが如し此變
成の文法終小一箇の体裁を為し書翰の往復日常の日
記等小此体を用ふる事とるなまり之代日記体と云
ふは此が是より文章大小世人ハ親接し漢文を以て歴
史を書し格式を書ること々全く衰へ一ハ此体を以
て記載する事とふれり其最も大なるもの九歴記、權記、
岡屋關白記、小右記、春記、水左記、經信郷記、長春記、台記、山
槐記、未海日次記、吉記、明月記、玉華殿記、三長記の類小
て之をよむ小味なく其体俗醜を免さず其書中或る後
世史家の撮摘と要をべき事件を記さるる小あらざと

雖ども之を要する小古人筆削の智なく凡そ耳目に觸る、所々事の要不要と問うを皆之を洩さざるを務むる此姿あり、然れども其文体の稍く自由を得る小及んと却て無用の事のみ多く記載し讀むも此を以て當時の事情を知る小苦す一むるに至る

斯く漢文一變の時小當りて日本の語法を以て文章を作事漸く世に顯るるに至る一真小日本文學の幸なき一蓋し和文此最古まの代云は古事記小如く如くはべし然れども其語や固と古語より既に當時の語にあらざる當時此語を以て記載するに至りて平假名片假名の發明ありて之を以て和歌を記すこと

大小行々社歲月の久しきを經て世の習俗に親和し終小日常の言語を筆に寫すに至りて時を在りと見えたる千六百年代の中頃より和文を以て紀行或は小説の類と記すふと漸く起り今其一二を示さん小千六百年代より伊勢物語作者業平朝臣竹取物語作者源順管家の作ふりと云ひ傳宇津保物語作者確ら大和物語作者滋春と華山院との類出でより千七百年代に至りて落久保作者源順と云ふも濱松中納言物語源氏物語の藤式部狭衣大貳三泉式部物語とりら急をや詳らふら枕の草子清少納言松島日記清少納言紫式部

日記藤式部蜻蛉日記右大将道母の類出でたり是時小至りて其用語漸く廣く其文字漸く艶小春宵秋夜の眺と記し少年佳人の情淺寫ること真小細小且つ巧みを添へたり嗚呼文字を以て事と記し且つ論をるる至難の業なり然まども自國此言語を用ひ自國の語法を用ひて之を書きしふいふでう其心の働を顯つたに至らざらんや千七百年代の和文を真小我り日本人心の曙光小して恰も朦昧の雲霧を闢る清明の影を現るが如く寔小目覺志く見えよるに蓋し文學此史の文章の和漢と撰とを唯だ其主意趣向の巧ふして味あるをこそ取るべきを其彼の漢文此論

理なき体と讀み來りて和文の有様を顧みよ其事の顛末あり其語の味あり固より數等の上よりありと云はざりを得を然れども不幸ふして和文の起源を多く婦女子の手比のみ成り男子よりて之を記すは賤しみ嫌ぶの有様なりうば文章小最も必要ある精神を欠き且つ其語句冗長小く各異の事情も乏しく徒ら一様か系有様と記すのこりりる彼の物語此諸書の如き當時の幼稚なる時代小ありてハ極めて巧みにして且つ其進歩も極めて速うふりしこと疑を容れずと雖も活潑の氣力もなく又人の注意淺促をべし有様の變化も此を當時人心の幼稚なるかと示すは明證なり

べし蓋し小説の味々各種の状態と集むるにあり文章の巧み々抑揚頓挫の其節を得る小あり然るに此物語の如き々多くハ唯優遊閑暇なる雲上人の癡々ハ有様と長くし編りたる事であつて其他を記すことあるなり嗚呼文學ハ人の心ヲ顯るもの如きを藤原氏以来の柔弱なる習俗と以て活潑敏捷の文章を得んと固とより望むべからずと雖とも其文の氣力なき亦驚く小堪へたり夫の源氏の如き袂衣の如き優美の情極めて多しと雖ども決して此弊を免れざるなり蓋し人智の進むに従ひ用語の愈々廣く文章の愈々精なること々自然の通理なる代以て用語の廣く文章の

愈々精なるを見ハ直ち小認めて以て人心の進歩せしことと証をば小妨けなからず千八百年代の以前ハあまて々漢語の用法尙ほ未だ日本の習俗ニ親和せざして漢語和文各々分離の有様なり一が歳月と經る小従ひ漢語漸く世俗ニ浸染し千八百年代の末千九百年代の初めより彼の所謂和文中ニ漢語と交ふこと愈々多くなりたり此時ニ當りて漢文の變体なり日記体ハ愈々日本の俗語ニ和し日本の俗文ニ亦漢文の句調ハ近似し其間自ら一種中間の文法と生ざるハ萌芽を發せり余々之と日本文と云ふ即ち當今ニて用ひ傳ふ文章を云ふなり千八百年代の末榮花物語と云へり

書^{卷四}十世小出でたり其著者藤原為業なるとも云ひ又
た赤染衛門ありとも云ふ確らなからず千九百年代の始
め小至り續世繼^{卷十}世小出とたり其著者亦詳かならざる
其他藤原通憲が本朝世記^{卷三十}と著りせりと云へども
惜むべし今小傳はらず是數書々實小我が國に於て日
本文を以て歴史を記載する所の濫觴なり蓋し物初め
より完全なると得ず前の二書に如く未だ彼の冗長な
る物語の文法を免れず其編史の体と恰も彼の
物語小於々系が如く月の宴夕霧雲井子の日をもつ春等
の題目淺掲げて篇くと區分したる者なり且つ其記
せし所も重なる帝王の遊宴大臣の榮華后妃の入内等

の有様と記す其間小和歌を交へ以て女こゝの狀態
と寫せしものなりされど其意淺注ぎし所決して國家
有要の事件と稱すべからざると雖ども之を代何事も差
別なく混合して記載したる六國史等の錯雜なるに比
し其が稍く選擇の智を存すと云ふべし且つ當時の情
勢を王室優柔の極なり代以て所謂政事上の重なる
る事件とあて人目小觸る所も遊宴漁色小過ぎざりや
も知るべからざる今之を記して後世の史家を以て古情
の一斑を窺ふを得せしめ且つ將來進歩の第一楷梯を
構成せしむ其功極りて多し
王朝の時小當りて唐人の説大小我國を行つれ學校と

ざれが今に至りて見ると一さそのと唯だ淺薄なり大冊
 の高閣小堆と見るとのみ抑も學士へのものは何ぞ為
 う小他の職工よりも重んぶべきや文學なる者ハ何が
 為う小他の貨物よりも尊ぶべき乎其功績の人類に及
 ぶ所如何小相異なり乎余を以て之を以て見ると小更に貴重
 をべきありを見ざるなり然るに況んや徒に古字に通
 じ古書に明らかなるのみは學士をや抑も人心の進歩
 ハ貨物の進歩と併行すべきものなれば今其貨物の進
 歩と妨げて特小文學の之を盛んならしめんと欲せば
 恰も車の兩輪の一を退けて他を進めんと欲すは小
 異ならず其目的を遂ぐるに能はざるなりは甚だ見

べき王政の柔弱小歸し學士を保護する能はざる小
 至りて我國の文學漸く獨立の崩を得其將に小傾覆せ
 んとするの時小至りて始りて見ると一さの書あること
 と之を自然に任するも何ぞ文學の衰零を憂へんや況
 んや自然に任して衰ふるとれを即ち人世に無用なる
 此明證なりをや

第八章

鎌倉政府創立以後戰國小
至るの間日本文學の沿革

千九百年代小至りて我國政事上一起りたる事件即ち
鎌倉政府創立の一事ハ文學の上一於ても非常の進歩
と促せしむれざる蓋し天下非常の改革ハ非常の感觸
を人心小來さば伐得を熟く此革命の成跡を考ふ
小其及ふ所特一政府設置の場所を關東小轉移した
のこに止りて去上一帝室專有と思ひ來りき此政權も
自ら帝室を離去して武臣の手小歸り下り萬民管
理の職小任り地方此事務を理りたり國司も其權と
殺られ地頭の威權諸國小興立りたり一を此世運
の移轉ハ際小立てるものは其方向小迷ひて驚駭せざ

と得ざれば殊小其以前より例一少なる事ども多
く政事以上一出來て一天萬乘の尊きも數く幽囚の辱
と免られ給はざり類の珍事續一として踵と接せ
るを太平小慣さ榮華に醜々一都人等如何でか恐怖
せざらんや此時一當りて夷と賤と慣さたり一東國の
男兒々都一攻め入り都の人々關西小追り此其他人民
の移住諸國の間小起りて人々新ら一小風俗を見新
き言語伐聞く小至まり抑も人智を物一接を小長
人情々事一觸り小精志さむれざる彼の数百年來
依然として運動なき有様なり人々此新ら一き世
間の現像を目撃する小及んで自ら數多の元素ハ胸中

小貫徹をふくむにありて此元素や則ち鎌倉政府の勤謙なる政務の下小愛育せらるる爛熳なる花を開き馥郁たる香を發するに至りし事誠小時日を費さざるなり千九百年代の中頃小至りて大鏡水鏡の二書世より出てより此二史の如き々大小歴史の体裁を簡明より後の世の人をちて古代の沿革と知り易らるるむこれ好書なるを蓋し此書未だ決して國家の有要なる事實を記せるものと稱さるる又決して事實と事實の關係を記せるもの小あらざりて徒小帝王大臣の歌代詠と詩と吟せらるる事ども代記を以て一篇の本主と為らざる如きを免る事ども雖とも之を彼の千八百年代の

末千九百年代の始より顯るる榮華物語及び續世継等小比をもろ小編史の体裁大に備ふる所あり即ち物語の体を免る社て歴史の体と近似を以て見ざる蓋し榮華物語の世小出たり頃まで我國小於して正史を記する事ハ必らず漢文を用ひる事にて漢語交りたり此和文を以てせし事絶えてなり和文を重小草子物語の類を記す小のみ用ひたる習俗ありしを榮華續世継の記者が此文章を以て歴史代記たる小當りても自らら嚴格の体裁を用ひる小勇進し難きの事情やありん優雅なる題名を掲げて篇章を區分せり然れども此二鏡の顯る頃小至りて々世の勢既小正事實

のこれまでも此文法を用ふ、有様と云はば斯く
 治世の順序を逐く歴史を記すを、浅敷んを、小至りく
 ものと見え、是を以て時世の進歩と知ふべし
 之小續きて葉室大納言時長の著せ、保元物語、平治物
 語、源平盛衰記保元平治二物語を源平盛衰記と稱す漢語も
 の口氣と帯ふ故小二書同一の手據りて其作者を葉室
 小あらを然れども今群書一覽の據りて其作者を葉室
 時長小及び信濃前司行長小著せ、平家物語の數書世
 小出たり此二氏の記を所を見、小行文の巧みなる
 と体裁の具りきふとに於て遙ろ小千八百年代の諸書
 小超越を、ゆのみふら、實に後世に史家として長く之
 に據り編史の術を試むるは、基を為せり蓋し文學

の進歩る文体の自由を得て十分小思想を吐露せしむ
 る小因ふなきべし而して文体の自由を得、言語の
 増加を以て第一の助とを漢語の和文小入りし、より文
 章の用語大増加し行文に自由を得、小至りと雖も
 も千八百年代はありて未だ十分なる親和を遂げな
 して自ら分離の体なき小あらず然る小二氏出つ、小
 及んで漢語と以て活潑勇壯なる状態を記し和語は以
 て幽鬱悲哀なる有様を顯し相交へて以て色々此趣
 きを寫し之を統ぶるに文章小最も有要なる想像力と
 以てせしむ無限の情趣毎句に間小存して誦讀此際
 自ら甘味の湧出を思ふの思あらむ是小於て我

の文章漢語和文此間小胚胎して始めて當今日本文學の基礎と固ふせりと云ふべし

然れども二氏の日本文學小大功ありて其想像力此緻密なりと文章の体裁を修正しつりしと小因る小何らざるなり彼の世小所謂記事体即ち事實より統記なり此文体を以て歴史と記載し事是なり抑も歴史と事實を記すものなり故小事實此種類に因りて沿革を示さざるべうら然るに我王政の時より編年の体即ち年度を以て事實を類別するの文体行ハ此て全く關係なき事實とも年月さへ同しけむ之れと一文の中小混記せり而して其年月詳ら小を

る史家の最も精神を籠めし所なり其体法を當時其政事の有様如何なりし人民の情況如何なりしを聞ふんと欲するは全く之を記さざるのみならず其記す所の事すら其緒が見出ること甚た難し唯菅公の類集國史のみ稍其緒を見出さし便を與へて人をして其卓見小服せしむるものありと雖も其記する所の事實々矢張國家必用の事小あらざり然る小二氏出り及んで年月の古今小關せを事柄に從ひて類別し之を記載ししむる數代の事件自ら一讀の下小瞭然たるを得たり嗚呼天下の事多し其沿革一々相異なり之を述べんと欲を以て編年の欄中小嵌入をべし

ら矣二氏乃ち其約束と解き人心伐して自由を發露せしむ其功多しと云ふべし且や此數書の著しれり歴史漸く和歌の端作りの如き体と免れ政事上の事件と記そに至れり又人の品行言語れ政事上不及せし事どもを記きり此体裁れ一たび世に出ても以後數百年間の史家皆之を據りて以て當時の時情と記載し後の世人とて興廢存亡の理由と窺ふを得せりたり其功多しと云ふべしされど見れば我國の歴史小於て政事上並小人民の有様を詳し小を述得たり實に保元平治以後の事の細ことを鎌倉政府の治世の斯く編史の体裁と行文の方法と小

於て大なる進歩を示せしのみならず實に法律の點に於ても亦後世の模範とならばべきの残出をせり蓋し王政の時小當りて制定をせし法律を全く唐の制度と移ししはもの小て果して能く當時の習俗小適合せしや否ハ今之を知りに由り然るども武人地方小群起し封建の元素を形成する小及んで其法律亦た地方と制をば小是らざる事々前記述べし所小て詳しなりべし鎌倉政府の時に至りて即ち其習俗は因り所小従ひ法律を編制し以て國体を固くを貞永式目則ち是なり此法こそ我が國小ふきて始めて自國の習慣を基として制定せしむもの小して能く時世に適し後の政府

すでも長く之小據らるるハ編者の榮譽多しと云ふべし

鎌倉政府創立の始り小當りて文學の進歩此の如く著
しかりしを其治世の間世小顯ハまた書籍皆見
べきもれ多し今其一二を舉ぐん小承久記著者未詳今昔物
語古今著聞集辨内侍日記讚岐典侍日記源親行の東關
紀行の類ハ或る政事上の得失と議し或る數多の奇事
と纂集し或る佛理と演述せしもの小して凡て見れば
これ意見と存せり而る其文章は乃ち和文ハ漢語と交
へたるもれりて其体裁亦た趣きを同ふせり
然るも是時漢學より一變を日記体の文尚行ハ

さざふ小あらむ彼の愚管抄、愚昧記、玉海、玉藻明月記、山
槐記、平戸記、東鑑、百鍊鈔、仁部管記、吉續紀の類々朝廷若
くハ鎌倉政府の官吏ハ手に成りたるもの小きて依然
として往時の紛雜なる体裁を存し更ハ改良をなすもの
あり代見ゆるなり又日蓮上人の註畫讚親鸞聖人傳繪
及び元享釋書、年中行事の如きも皆此体と以て記せり
されど當時と雖とも公けられ尺牘日記等々尚此体を用
ひるはこと茂知るべし唯だ其愈々和語小親和したる
有様を見りのこと
蓋し人智の未だ進まざる小當りてや自然の道理と講
究し人類の幸福と増進せしむる類の事々未だ十分小

行つたを以て却て人心は恐怖を以てむる事件も人心と
集むること多しは太平の時も當りて世に顯れ
たる事件も常小曖昧の内は埋むれ却て鬪争戦亂の際
に當りて人と殺し城を攻むる勇將猛卒の武者振のみ
が史上小詳ふる諸國の歴史其揆を同ふせり鎌倉政
府の治平伐致ると百五十年其間執權並に評定衆の智
略あり功勳あり事々古史も數を述がは所ありて
且つ是利將軍の時も至り大に武人の羨慕する處あり
事々當時の史も見ゆ然まども此平和あり行ひ當
時の史家其目を注ぎし所もあらざり成以て如何なる
政道なりし如何なる文勳なりしかは至今も小詳る小

する能はざるを惜むるは此一事以て鎌倉時
代も於て文學尚ほ未だ民間に洽らざり人心の度未だ
進まばしを知らざるべし
は有様を以て日本の文學殆んど百五十年は太平
の雨露に浴せし後再び政事上の動搖出來り鎌倉治世
の文學の最後は光耀を發せしを是れ即ち二千年
代の末元弘建武の争亂あり蓋し前文も略ぼ説示せ
し如く戦亂に到底文學を進振せしむるその小あらざ
ると雖ども多く人心を蒐むるの事件あり代以て其時代
に適志しは進度は著書多く此際も現りか、ことなり
されば元弘建武の亂起り不及んで鎌倉時代も養成し

たふ文學の種子ハ更ニ熟練の香を添へて世ニ咲出て
 きり今其最も著明にして且有益なりそのを列記せん
 小増鏡一條冬良の著なり前の大鏡保曆間記未詳神皇正
 統記源親太平記作者極め園太曆太政大臣公賢船上記未詳伯耆
 卷未詳關城書裏書未詳皆々見べきの書なり其述ふ處
 々多くハ戰亂の有様若くハ帝統將門の確執等と記り
 たり小止まりと雖も其間或る政事ハ得失帝統の正潤
 並ニ公家武家の盛衰ハ基く所と論するもの多し其記
 者の智力相同し其議論素より功拙ハふにあら
 ざると雖も其文体ハ則ち盛衰記平家物語等と同一の
 ものなり稍々漢語と交ふもの多きを見たり就中太

平記の如き之を用ふる事極めて多く稍々博き小誇
 りの姿なき小あらむ之を要を依り小文章の點ハ於て
 未だ盛衰記平家物語等と輕重ハ難しと雖も其眼目
 の注ぐ所ハ至りてハ當時の書却り往時より勝る所あ
 り就中正統記の如き日本古來ハ沿革を統括し國家
 有要の事實を網羅して殆んと遺る處なく其王家ハ衰
 頽武族ハ興立等小注目し其源由を推究す如き真
 小得かたき書と云ふべし蓋し我國ニ於て社會の有
 様成記其變遷の基く所を論する書籍實小あること
 なく盛衰記平家物語の如き其文体極めて巧みなり
 と雖も著眼の鋭なる小至りて遙く小之を二千年

代の末二千百年代の始り小顯まゝは諸書に譲らざるを得ず而して正統記を實小鏡の鏡なるものあり之を後世の歴史小比をれが其議論尚ほ議論すべし處多く其体未だ備はらばる所ありと雖ども二千年代よりして此書ありて以て當時の文運を後世小誇稱をる小足らるり

此時小當りて隨筆の書亦た見らるべきもの多し明恵上人のほろり草子兼好法師の徒然草此如き議論も高尚し如何も手際なる書体あり而して其論稍く心理の事に及ぶ所あり實に日本の文學裝飾此一具と稱すべし又程朱の學も此時始りて我國小傳りて

惠法印之代學びてと云ひ傳ふされが我中世文學の最も盛んなるは此時小ありと云ふも証言ありあらず蓋し學問上の研究を人心の中小發する事ハ後世開化の結果小して經驗少き世より絶えて現はるる所なりと雖ども彼の想像力小至りては早くより人の心小結ぶもれなきは鎌倉時代の諸書中より智慧淺進むる此資料小至りては殆んど之淺欠くと雖ども情を動らその趣向に至りては既小大に文章上に現はるるり其所謂進歩ふるものも實に其想像の増進小外ならざるなり當時の史を記し事を論むる淺見る小多くは皆無常と觀し物の憐れと説くこと多し抑も此想像ハ全

く佛法より由来するものにて王政の時より未だ十分
 小文章上小顯りたゞり源氏、狹衣、榮華の如き艶ハ則
 ち艶なりと雖ども未だ悚然と志て恐るゝの想像少く
 此想像源平盛衰記より起り平家小至りて最も盛ん
 太平記、徒然草に至りて極りて密ふり其他神皇正統記
 の博識より卓見ふゝ保曆間記の簡單小して静肅な
 りも佛法の想像小至りて自ら全篇小貫通するも此
 あふが如く抑も此の如き所以のその王政は時より
 佛道久しく人心小浸染し鎌倉政府の時に至りて禪學
 愈々盛んなりしを為り小文學の上小大に顯りふゝ小
 至りしふり而して我國の文學此想像れ為り小裨益と

得たりこと少くふあらばるるを
 鎌倉政府既ら止し封建武族の海内小割據をより世
 の中次第小衰へ亂さるるを文學も亦隨と退歩の
 姿となさるる然れども二千百年代の中頃即ち足利氏治
 世の始め小當りては鎌倉以後の文物尚存するそのあ
 りて文學は見るべきもの少なからず南朝の末路に當
 りて世小出てをば櫻雲記、續神皇正統記、南朝記傳、梅松
 論、吉野拾遺の如きは前の諸書小及むざる所多しと雖
 とも其文法整ふ所あり以て當時の事情を詳らふに必
 要の書なりとせば此時に於て未だ遠くに文學
 衰零せりと稱する能はざるそのあり其後封建潰裂の

勢ひ日月増進し世の有様益々危殆ふ迫りしに
 當時に顯は社を著る書も從ひて情味を失ひ其文章愈々
 枯燥を多ふ至れりさきか應永記ハ明德記より劣り嘉
 吉記も應永記より劣れり其後椿葉記鎌倉大草子此書ハ稍
 見るべき處あり應仁記の類ありと雖ども皆文意の明らなら
 ざらむれ多し要するに二千百五十年の頃より殆んど
 百年間文學次第の退歩の姿を示せり真に歎むべきこ
 となき蓋し斯く文學の衰微に至るも彼の王政の時此
 如く外國の古語不及くとして人間天性の智力を働か
 ざる能はざりしに如き弊風の行はれしにあらざる其
 文体の自由を極めたること恰も鎌倉時代と異ふ

かなまじとも唯人々安然とす思想を此點に注ぎ難を
 世の有様とありしに如く嗚呼海内麻の如く亂世
 群雄割據を伴はし世に至りて人民豈に文學成事とす
 の暇あらんや則ち天然に打ち勝つれ志は去りて敵を
 討はるれ略となす筆硯に親しむの樂を散して奮戦鏖
 殺の怒りとなす茲に至りて終に文學の光を東洋孤島
 の内に滅せり嘆するに勝ふべけんや
 思ふに文學の消長を知らず其記を其所の時代の様子
 と想見すはる便利なるべし其彼の源平の戦南北朝
 の争れ有様と思ひ見しに關東武夫の勇ましき王都の
 小婦の美しき其他攻城野戦の篠木を削り駈引する顔

前小見の如くに思ふ、小あうをや去りて應永千
零五十年 嘉吉百年の世に亂れ海内湧くか如き小至りて
如何なる將士が智略ありしや如何なる武夫が猛勇な
りしか思ふ、武勇の氣當時不減せを闘争射撃の術古
より拙るからず、殊に此時とても秀才佳人の全くなき
にもあらざり、唯た其は文學の衰へをふが為り、其人柄
の慕ふべきふる事跡の好みもべきを見ざるなり、
是社以て文學の盛衰を證をば不足なるなり、
以上は於て略は文体の變遷と智情の盛衰とを通覽し
たき、更小古代は回顧して文章上小現は社は氣風
を一見をば、蓋し往昔千三百年代より千五百年代、

至りて漢文のみ世小行り社は文章上研究想像の行
ハふ、とるく唯く渾沌とて、智情の未た分るれざり
姿なりき是蓋し幼稚れの精神を以て至難ふ、外國
の文章言語を記憶せんと勉め絶えて其他を顧み、能
はざり、が為めならん千六百年代小至りて日記体及
ひ和文の二者出来と稍く人心の一斑淺窺ひ得べき小
至り、今當時は顯れは想像を竹取うつば等、就
て考ふ、小其感情全く當今の人情小相違、恰も異境
小入り異人小逢ふの思あり、如何なる斯く想像の心
裡に發するやと疑はふ、程あり蓋し當時の人未だ多
く事物小接をば、其想像精密ならば、が為り小自

ら世ふあま得ぬ想像の胸裏に發すはふふべし故に其
 文も亦た素樸にして更な味ひるべし然るに千七百年代
 の末より文弱の氣風都の内に發生し滿堂婦女子の如
 くなきふなきが其文章稍く猥褻淫風の加も亦免る
 社々と雖ども亦自から艶羨の情味と添ふるに至りて
 而て千九百年代に至りて關東武夫の氣性漸く世に顯
 々社をれが活潑勇壯の氣又文學の中ふ加はりたり是
 迄即ち盛衰記、平家物語の氣と優と茂兼ね之を讀み
 たり樂まざり所以ふり是より天下治平と致す事殆んと
 百五十年人智始めて社會の大勢と見ると知る故小時
 勢論漸く文學の中ふ參入して文章自ら靜肅完備は体

と致さる是則ち保曆間記、神皇正統記の自ら精神を存
 して而して嚴格の体あり所以なき其後ふ至りて武人擅
 横の世の中と成り下りて殺伐鬪争の災世雲と蔽ひし
 うる文章紛雜の姿となりて終ふ全く情味を失ふに至
 り然るまども之あり猶可ふり二千二百年代の末にハ
 全く之を失ふふ至れり豈は哀しむるや嗚呼我國文
 學を史上小見ると近くと為るべし然るに小王政の時
 之と保護し失し強ひて日本の精神を驅りて外國に文
 章と古語と小注と之をして十分に發達すふを得せし
 める鎌倉政府の世となりて日本の文學ハ最も便利な
 り文體を求めて發育し終ふ我國文學の基を立てし

と雖ども又一からぞきて封建亂離の世とふり文學も亦世事紛紜の中小滅をば小至社に應仁の亂より以後徳川氏の天下を制する小至つまで殆んど百五十年間文學更ふ再興の勢ひより唯た武人鬪争の慘状を見

物の理を究め其功用と知らんとすふを固より智力の働きのふして研究の部類は属をべきそのふきども其理を究め其功用を知りの後さてこそと感ずるの感情に至りては即ち想像の部類は属をべきそのふき之例へん小諸業無常是生滅法と云へり語の如きは萬有の理と説明したるものなるべきをさども其

理を心小悟りて人生の墓ふきを觀むば小至りては即ち是れ想像なるをされど研究と想像とを其性質大小異なりども其相移りや恰そ比隣の如き處あるふり研究の浅き時と當りては想像も自ら浅く研究の進む小至りては相像も進みて高尚なるなり彼の赤壁の賦に西望夏口東望武昌山川相繆鬱乎蒼々此非孟德之困於周郎者乎と云るが如きは往時を追懐するの智ある小はらばさるる感ざざるは想像れを又客亦知夫水與月乎逝者如斯而未嘗往也盈虚者如彼而卒莫消長也云々の如きは理淺解する小あらざれば感ぜざるは想像なるを徒然然とあだ野の露さゆら



日本開化小史四の巻終

時なく鳥部山の烟立去らで住みこつるならひふら
ば如何小物のありれもふらん」と云ひ又「花ハさか
る小月々くまれば浅のこ見の物うと雨のむらひく
月をこひきれあけて春のゆくへ志らぬそなふあは
れあて情もか」と云ふが如きも亦た十分ある研究
はくして能く言ふ處もあらず故に最巧みふ
の想像を述べんと欲もど最も研究を博くせざれば
からば是れ想像と研究と文學上小於く相待つ所以
なり

卷之四

東京 書林 賣捌

明治十一年二月廿六日板權免許
同十六年三月六日再板御届
同十六年三月出版

著述兼出版人

東京府士族

田口卯吉

東京牛込區牛込北
山伏町四十三番地

- 日本橋通二丁目 北畠茂兵衛
- 同通二丁目 稲田佐兵衛
- 芝三島町 山中市兵衛
- 浅草茅町三丁目 北澤伊八
- 小石川大門町 青山清吉
- 日本橋通三丁目 丸屋善七
- 同通二丁目 小林新兵衛

010190529539

48-13782

